

アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM 2001. 9. 30 No. 47・48 (合併号)

平成13年度夏休み企画

アイヌ民族博物館では、地域の子どもたちにアイヌ文化をより身近に感じてもらうと、「親子で楽しむアイヌ工芸教室」(8月12日)、絵画コンクール「コタンを描こう」(7月25日～8月18日)を実施しました。



工芸教室・弓矢づくり



工芸教室・鹿笛づくり



工芸教室・ござ編み



絵画コンクール「コタンを描こう」・表彰式

復活したサケ儀礼

—登別・千歳・札幌・白老の事例—

1982年、札幌市街を流れる豊平川の河川敷で、「アシリチェップノミ」（新しいサケを迎える儀式）が復活した。新聞などのメディアは、100年ぶりにアイヌのサケ儀礼が復活したことを大きく報道した。この儀礼の復活は、登別、旭川、千歳、十勝、白老…と、飛び火するように各地へ広がっていった。今年で20回目を数えた札幌と、それに続いて儀礼を復活させた登別、千歳、白老でのサケ儀礼について報告する。



アシリチェブ（初サケ）



登別ベッカムイノミ

ケを捕る伝統的な漁具である。この漁具を用いた登別のサケ儀礼は、他の地域と異なるものとして注目された。しかし、11回目からは、ラウオマブによるサケの捕獲をやめ、ベッカムイノミの儀礼のみがおこなわれている。そのため現在登別では、アイヌが唯一、川でサケを捕ることを許可される特別採捕^(注)の申請はおこなわず、祭壇に供えるサケは、登別漁業組合から提供されたものである。

ベッカムイノミは、地元出身の学者である知里真志保の論文「アイヌの鮭漁」を参考とし、室蘭や札幌のエカシやフチたちの協力も得ている。また、儀礼で使う道具や作法については、千歳市在住の野本久栄氏（アイヌ文化アドバイザー）の指導を受けている。

当日の会場には、登別支部青年部により、祭壇や炉が手際よく整えられた。神に捧げるイナウ（木幣）は、数日前に材料となる柳を採ってきて製作された。ヌサに向かって左から順に、ヌサコロカムイ（幣の神）、トマリコロカムイ（泊の神）、ペップトゥンカムイ（川尻の神）、ワッカウシカムイ（水の神）、チロヌブカムイ（狐の神）の五神が祭られている。ヌサを飾る花ござは登別支部婦人部の手によるものである。

祭壇は、川側（東側）に設置され、炉との位

—登別—

名 称：「ベッカムイノミ」

主 催：北海道ウタリ協会登別支部

期 日：2001年9月1日（土）午後1時

会 場：登別川河口（北海道コンクリート工業
登別工場横）

祭 主：飯田昭市（北海道ウタリ協会室蘭支部
支部長）

回 数：第15回

参加費：1,000円（昼食代・ウタリ関係者無料）

助成金：（財）アイヌ文化振興・研究推進機構

この儀礼は当初、「ラオマブカムイノミ」と称しておこなわれていたが、第11回目から、「ベッカムイノミ」（川神のまつり）と名称を変更した。ラウオマブとは、柳などの細枝を編んで作った円錐形の「うけ」のことで、マスやサ

置関係は、屋内での儀礼と同様である。このように、屋内での儀礼様式をそのまま屋外にもちだした例としては、札幌のアシリチェップノミがある。登別支部がサケ儀礼を復活する際に、札幌のアイヌの協力を得たため、こうした形が取り入れられたようである。

儀礼は、司会役をつとめる支部会員によって進められた。飯田エカシの「オンカミアンナー」のかけ声で儀礼がはじまり、アベフチカムイ（火の神）をはじめ、祭壇にまつられている神々へ、感謝のカムイノミ（神への祈り）が捧げられた。それに続いて、女性たちによりイチャルパ（先祖供養）がおこなわれた。イヨマレクル（酒を注ぐ人）やヌサの神々への祈りを担当したのは、支部の青年たちである。上武支部長はあいさつの中で、これまでの取り組みについて「若い人たちが率先して後を継いでくれるようになった」と述べていたが、このように若い世代が身をもって文化を伝承することが、この儀礼の大きな目的である。

—千歳—

名 称：「アシリチェップノミ」
主 催：北海道ウタリ協会千歳支部
期 日：2001年9月2日（日）午前11時
会 場：千歳市蘭越（名水公園長沼用水取り出し口）
祭 主：石辺勝行（北海道ウタリ協会千歳支部支部長）
回 数：第11回
参加費：500円（昼食代・ウタリ関係者無料）
助成金：（財）アイヌ文化振興・研究推進機構



千歳アシリチェップノミ

千歳支部では、毎年100尾のサケの特別採捕申請をおこなってきているが、今年はわずか17尾しか提供されなかった。これは、サケの回帰率との関係もあり、「千歳サケのふるさと館」によると、今年のサケの回帰率は、9月現在で前年度の40%とのことであった。しかし、事前に申請がおこなわれている以上、行政側はそれに対応すべく準備をする義務があるはずである。当日になって突然17尾のみの提供になったというのは、行政側の怠慢であるといわざるを得ない。アイヌが失った権利のことを考えれば、たとえ100尾の提供でも少ないのではないだろうか。

千歳支部のアシリチェップノミも、札幌のアイヌの協力により復活したもので、当初は札幌のやり方が取り入れられた。しかし、地元の古老たちの記憶と、千歳支部の青年たちによる伝統儀礼の掘り起こしにより、しだいに千歳のやり方が確立していった。

今年のアシリチェップノミの祭主は、石辺支部長がつとめた。司会役による解説の後、祭主による開会の祈りがおこなわれた。石辺氏は、はじめての祭主とのことであったが、それを感じさせない、すばらしいカムイノミであった。川下（東側）に設置された祭壇には、ワッカウシカムイ（水を司る神）、シリコロカムイ（大地を司る神）、コタンコロカムイ（村を司る神）の三神が祭られている。祭壇と炉の位置関係は、登別と同様である。

千歳川での伝統的なサケ漁は、丸木舟を操ってマレク（釣鉤）でサケを突くのだが、今年も千歳支部の男性が、17尾という少ない中から見事にアシリチェップ（初サケ）を捕らえた。サケが祭壇に供えられ、全員によるカムイノミが捧げられた。それに続いて、女性たちによるイチャルパがおこなわれた。昼食後には歌や踊りが披露され、最後に全員で輪になって踊り、第11回目の千歳のアシリチェップノミが終了した。

千歳のサケ儀礼は、はじめの頃は外部からの協力を得ていた。しかし、支部文化部の青年たちが中心となって、カムイノミや道具づくりの

勉強会を重ね、現在では外部から祭主を招くことなく、自分たちで儀礼をおこない、文化を伝えていこうとしていることに、大きな意義がある。

—札幌—

名 称：「アシリチェップノミ」
主 催：札幌アイヌ文化協会・アシリチェップノミ実行委員会
期 日：2001年9月15日（祝）午後1時
会 場：豊平川西河川敷
祭 主：豊川重雄（札幌アイヌ文化協会会長）
回 数：第20回
参加費：500円（昼食代・ウタリ関係者無料）
助成金：（財）アイヌ文化振興・研究推進機構、北海道、札幌市



札幌アシリチェップノミ

この儀礼を復活させた中心人物である結城庄司（第一回アシリチェップノミ実行委員長）は、アイヌ文化の復興とサケの漁業権の復権を求めて、アシリチェップノミを復活させることを訴えた。これに対して全道各地のアイヌが賛同し、特に、エカシやフチたちの協力なくしては、この儀礼の復活はあり得なかった。

今年で20回目の節目をむかえたアシリチェップノミは、毎年豊平川の河川敷でおこなわれているが、アシリチェップとして供えられるサケは、石狩川で獲ったものである。

今年、特別採捕が許可された500尾は、祭主の豊川エカシが中心となり、石狩川河口付近で、儀礼の数日前から刺し網漁による捕獲が続けられてきた。この漁はエンジン付きの船によるも

のであるが、初日の漁の前には石狩川でカムイノミをおこなって、漁の安全と豊漁を祈願した。捕られた初サケは火の神にアシリチェップとして供えられ、カムイノミがおこなわれた。この儀礼は一般には公開されていないが、これが伝統的なアシリチェップノミに近い形のものであろう。そして、ここから運ばれてくるサケによる豊平川でのアシリチェップノミは、多くの人々にアイヌとサケの伝統的な関わりを紹介するとともに、アイヌのサケ漁の復権を目指す上で大きな役割を果たしている。ずっと祭主が続けて来ている豊川エカシも「食べるくらいはサケは自由に捕らせて欲しい」と語っていた。

当日は増水のため、マレクによるサケ漁はおこなわれなかったが、300人ほどの参加者が集まり、例年どおりの盛大なカムイノミがおこなわれた。川側に設けられた祭壇には20の神々が祭られたが、このなかには、これまでに儀礼に関わってきたエカシたちが祭った神々も含まれている。儀礼のあとには、女性たちによりイチャルパがおこなわれた。また会場では、札幌ウポボ保存会や、アイヌアートプロジェクト（代表：結城幸司）の若者たちによる、歌や踊りも披露された。



イチャルパ（札幌）

—白老—

名 称：「ペッカムイノミ」
主 催：北海道ウタリ協会白老支部
期 日：2001年9月22日（土）10時30分
会 場：ウヨロ川河畔
祭 主：新井田幹夫（当館伝承課課長）
回 数：第13回

参加費：無料

助成金：(財)アイヌ文化振興・研究推進機構、
白老町



しらおいチェフ祭

白老では1989年の第一回から、「しらおいチェフ祭」の事業の一環として「ペッカミノミ」をおこなってきた。この「しらおいチェフ祭」は、北海道ウタリ協会白老支部が中心となり、白老アイヌの伝統的なサケ利用文化の伝承と町民に対する啓発活動を目的としてはじまったイベントであった。しかし、ペッカミノミなどの伝統行事を支部が担当したのは、最初の数回のみであり、その後は現在に至るまでアイヌ民族博物館がおこなってきた。

今年の「しらおいチェフ祭」の会場は、白老町の意向もあり、従来の白老港から「アイヌ文化伝承の里・ポロトコタン」に移された。現在町は、国のアイヌ施策のなかで進められている「アイヌ民族文化公園」（仮称）の誘致活動をおこなっている。ポロト地区には、アイヌ民族博物館とその他の観光施設があり、町としてはこの地区の活性化を図るためにも、国の施設誘致を必要としている。そのような背景のなかで、この地区へのアイヌ文化事業の一元化が図られたのである。

しかし、ペッカミノミに関しては、これまでどおり白老港付近のウヨロ川でおこなわれた。ウヨロ川は、町内でサケが最も多く遡上する川であり、昔から白老アイヌの重要な漁場であった。白老のサケ儀礼については、犬飼哲夫による詳細な記録が残されており、それらを参考にしながら地元の古老の協力も得て、現在の

サケ儀礼が復活した。

当日はまず、アイヌ民族博物館のポロチセ（伝統家屋）で、火の神様に「ペッカミノミ」をおこなうにあたっての祈りが捧げられた。その後、会場をウヨロ川河畔に移し、祭壇や炉が設置された。祭壇は川の下流方向に立てられ、向かって左から順に、トマリオルンカムイ（入江の神）、チワシコロカムイ（河口の神）、ペップトゥンカムイ（川下の神）、ペテトクンカムイ（川上の神）、ケマコシネカムイ（キツネの神）の五神が祭られた。祭主の「オンカミアンナー」のかけ声により儀礼がはじまり、カムイノミがおこなわれた。

しかし、北海道ウタリ協会白老支部から儀礼に参加したのは、支部長をはじめ数名のみであり、その他の会員は、新しいポロト会場の方でサケなどの海産物やビール販売の準備におわれていた。白老支部がこのような祭りを開催して独占的にサケを販売できるのは、アイヌとサケの伝統的な関わりが背景にあるためであり、伝統的なアイヌ文化をおろそかにした祭りの発展はありえない。

—おわりに—

現代に生きるアイヌにとって、サケ儀礼の復活により、サケとの伝統的な関わりを再認識する機会を得たことの意義は大きい。しかし、この儀礼が復活した背景には、アイヌ文化の復興とサケの漁業権を求める運動があったはずである。儀礼をただ継承していただくだけではなく、それをおして何を目指していくのかを、アイヌ自らも今、問い直す必要があるのではないだろうか。

注）特別採捕とは、アイヌが伝統的なサケ儀礼をおこなう際、北海道が儀礼用としてサケの採捕を許可するもので、今年は、千歳で100尾、札幌で500尾の採捕許可数となっている。

（野本正博）

学芸員実習の受入について

学芸員課程の開設大学が増加するなか、当館にも道内外から博物館学芸員実習の希望があり、平成13年度は8月20日～同月31日までの12日間、3名の実習生を受け入れた。

実習は主に、アイヌ文化、博物館の活動を中心に日常業務や各担当職員の専門分野について学習、実務をおこない、実習期間中に平取町で開催された北海道博物館協会学芸職員部会研修会にも参加した。

今後の実習受入や実習内容など、当館における学芸員実習のあり方の参考にと、実習生には博物館実習レポートを提出していただいた。

博物館実習を終えて

北海道教育大学札幌校 前園 亜希子

アイヌ民族博物館での実習で最も強く感じたのは、「人」が中心となって成り立っている博物館だということである。そして、そのような博物館で実習させていただいたことを、大変嬉しく思っている。

他の博物館とは違い、伝承保存活動の一環として、展示のみならず、チセを屋外に作り、観客がそれを体で感じる。また、更にそのチセの中での講話や、国の重要無形民俗文化財であるアイヌ古式舞踊の実演や刺繍、彫刻、ムックリ製作、調理等の体験学習を行う。当然ながらそれは「演じる人」と「観る人」、または「教える人」と「体験する人」、その双方がいて初めて成り立つものであるが、そのことこそ人の記憶に残り、アイヌ文化を理解する上で最も大切なことのひとつではないかと考える。展示品を視覚的にとらえることしかできなければ、アイヌ民族はその人にとって「リアル」ではなくなる

だろう。しかしもっと立体的な、体で感じる「文化」であれば、たとえそれが昔の家（チセ）や昔の食べ物（オハウ）であっても、少なくともそれらと自分の現在の時間の流れとを共に合わせて考えることにつながるのではないだろうか。そのような体験から、現在またはこれからのアイヌ民族のあり方について考えるきっかけにもなると思う。

また、こうした「自分たちの手で作り上げる」博物館でありながら、同時に他の博物館、民族、研究者など、様々な人との関わりが深く、その中で幅広い活動がなされていることも見逃せない。つまり、私はこうしたありとあらゆる方面の人との関わりが積極的であるということを感じたのである。偏った分野の資料を取り扱う博物館であるほど、この博物館のように他方面とのつながりを重視すべきだと考える。そしてこのことは博物館という大きなものに限らず、対人との関わりについても同じことが言えるのではないだろうか。偏った人生ではなく、他者との関わりの中で自分以外のものの見方、考え方を吸収しながら、自分自身を成長させていきたい。私はこの2週間でそのことの大切さを学んだ。

北海道教育大学札幌校 長谷川 麻衣

博物館実習を終えて、まず感じることは、学校で指定されている博物館ではなく、自分の希望していた博物館で実習をすることができて、本当に良かったということです。私がここで良かったと感じる理由のひとつに、私たちの担当をしてくださった方々の魅力が挙げられます。この12日間で、たくさんの人から色々な話を聞き、いくつもの新しい考え方を知ることができました。学芸員の仕事の多様性に始まり、そ

れだけにとどまらず、博物館のこれから、アイヌを取り巻く環境、それに対して周りがどう関わってゆくことができるかなど、いままで触れることのなかった多くの問題を知り、考えるきっかけになりました。

その中でも特に影響を受けた考えは、「アイヌの人たちが自分自身で文化を取り戻し、また、これからのアイヌが進むべき方向を考え、進んでいかなければならない。それを、私たち和人が手助けし、ともに作り上げていくものだ。」という考えです。しかし、今まで私は、そうだったことは、お互いの手を借りていくものであると当然のように思ってきました。そのため、ここの博物館に来て、アイヌの人たちが自らの手で行ってゆくべきだという考えを持つ方々に出会えたことや、実際にそういった考えを持った方々の周りで実習ができたことは本当に良かったと思います。まだ、現実には様々な問題がありますが、これから10年先、20年先なりのアイヌ民族博物館がどうなっているのかとても楽しみです。

にもかかわらず、まだまだ、私たちの、周りの意識が薄すぎると思うのです。これは、道博協学芸職員部会研修会（平取）に参加した時にも強く感じられました。研究発表の場面で、伝統芸能を扱っているにもかかわらず、アイヌの古式舞踊に関してはほとんど情報や知識がないという現状を垣間見てしまったからです。確かに、この研修会が平取で行われ、アイヌに対しての誤った見解を述べてはまずいということもあったでしょう。しかし、本州から入ってきた舞踊に対しては説明や映像があっても、アイヌ古式舞踊に対してはほとんどないということは、発表者、個人の責任ではなく、もっと深い部分に問題があると私は思います。それこそ、アイヌを取り巻く環境を変えていかなければならない、周りの意識が改善されていくようなアプローチが求められていると思うのです。

そのためには、何ができるだろう。今、何が悪くて、どう変わっていかなければならないのか。こういったことを考えたときに、実習を終える前の私ならほとんど思いつかなかったでし

よう。しかし、この実習を通して、アイヌを取り巻く環境に関しては、自分が考えていた以上に様々な方向からのアプローチの方法があることにはじめて気づきました。例えば、芸術・音楽・舞踊・料理・言語・歴史・教育など、実に様々な方向からの取り組みができます。その中でも、やはり、真剣になって聞いてしまったのが、自分の好きなこと、興味のある分野のことで、特に、料理・芸術・教育に関してはそうでした。東京に、アイヌ料理専門店があるという話を聞いては、想像をふくらませ、スミソニアンで行われたアイヌ展での現代美術の展示の話聞いては、驚き、道内のアイヌ教育の現状には、深く考えさせられました。

実習中は、友達といつも一緒にいたこともあってか、家に帰ってからでも色々話題になることが多く、話しているうちにどんどん話がふくらんでいって面白かったことを覚えています。同じ問題について考えていても、人によって見る視点も、興味も違うのでなるほどと思うことがたくさんありました。アイヌ料理の専門店にはぜひ行ってみたいし、いままで分らないと避けていた現代美術（アイヌのアーティストに限らず）にも目を向けてみたいと思います。また、札幌に帰った後は、教師になる友達が今後どういったアイヌ教育を進めていくのかとても興味があります。

2週間という短い期間でしたが、たくさんの方と出会い、大変貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。今後は、今回の実習で得たこと、感じたことを忘れずに、実際に自分で見たり触れたりして次のステップに進めていきたいと思います。そして、これから出会う新しい経験や考え方につなげていきたいと思っています。

群馬県立女子大学 西尾 久美子

わたしは卒業論文をアイヌ文様について書こうと決めていたこともあってアイヌ民族博物館での博物館実習を希望しました。学芸員になるための勉強ももちろんですが、アイヌの文化、

特に芸術について、本を読むだけでは学べないことを知る機会が得られるのではないかと考えたためです。

実際、児玉マリ先生や本田優子先生をはじめとする学芸課の方々からさまざまな分野に関するお話を伺うことができたこと、そして写真でしか見たことのなかった資料を実際を目で見て、指で触れることができたことは、これまで本で読むことだけが唯一の研究方法だったわたしにとってすばらしい経験になったと思います。実際に見て、触れて、初めて気づくことや疑問に思うことがたくさんありました。

しかし同時にこれらの経験は自分自身の勉強不足を思い知る要因にもなりました。卒業論文のために一年以上研究をしてきた衣装や文様についても、またそれ以外のアイヌの文化、言語、歴史、そして現在アイヌの置かれている立場についても、わたしはあまりにもものを知りませんでした。言語や歴史について言えば、勉強をする必要はそれほどないとみなしていたといってもいいかもしれません。アイヌの衣装に強いあこがれを持ち、その文様について研究するつもりだったわたしは、その分野のみ勉強すればそれでいいと考えていたからです。

本田先生は講義の中で「アイヌの文化だけを学ぶのではなく、文化と歴史をせめて半分ずつ学ぶべき」というふうにおっしゃっておられま

した。それはどういうことでしょうか。わたしはこの実習期間に学芸課の方々からお話を伺うなかで「アイヌを学ぶ」ということについてずいぶん考えさせられました。文化は目に見える物質的な部分と目には見えない精神的な部分とで構成されていて、それらは歴史の中で担い手の置かれる環境の変化に伴ってさまざまにあり方を変えてゆくものです。だからアイヌの文化の目に見える部分だけを追い求め、その背景にある歴史や内側にある精神的な文化から目をそらしたのでは、文化の本質を捉えることは出来ないのだと思います。

アイヌ民族博物館での博物館実習はわたしにとってすばらしい経験となったのと同時に、文化とは何か、ということについて、また「アイヌを学ぶ」ということについてきちんと考える、あるいは考え直すべき課題をたくさん与えてくれたように思います。今後与えられた課題と向き合い、自分なりの考えを導き出してゆけたら、と思います。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらずわたしたち実習生のためにお時間をさいてさまざまな手ほどきをくださった学芸課の方々をはじめ、このような貴重な機会を与えてくださったアイヌ民族博物館の職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

アイヌ民族博物館新刊紹介

『伝承記録5 虎尾ハルの伝承 鳥』

静内地方の伝承者、虎尾ハル氏（1902-1991）の聞き取り調査記録から、鳥に関する伝承及び口承文芸を収録。口承文芸は音声資料（CD）を添付した。志賀雪湖（千葉大学非常勤講師）が編集を担当。

2001年2月28日発行。B5判、149頁。CD（71分）付き。（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構出版助成事業）

『アイヌの衣服文化』（増補版第二刷）

平成3年9月1日から同年9月30日まで開催された第8回企画展の図録。同展で展示した北海道

各地に所在するアイヌ衣服99点をカラー写真で紹介。児玉マリ「アイヌ民族の衣服」を付す。

1991年9月1日初版、2001年3月31日増補版2刷発行 B5判81頁。フルカラー。（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構出版助成事業）

『アイヌ民族博物館研究報告 第7号』刊行

- ・姉帯正樹・村木美幸・安田千夏・南 収「アイヌ民族の伝承有用植物に関する調査研究（第6報）白老ウベウ考」
- ・本田優子「川上まつ子アイヌ語文例集」
- ・安田千夏「児玉コレクション『キケウシパスイ』について」

2001年6月30日発行。B5判、102頁。（白老町社会教育事業補助事業）

◆◆博物館短信◆◆

12月

- 1日 ●月初カムイノミ（当館ポロチセ）
- 2-3日 ●（財）アイヌ文化振興・研究推進機構主催
「第13回アイヌ民族文化祭」古式舞踊出演
（白老民族芸能保存会事業。伊達市＝18名）
- 3日 ●台湾原住民資料受贈（絵ハガキ1冊・ショ
ルダーバッグ1点、邱 汝娜・台湾行政院
原住民委員会社会福利所所長／タペストリ
ー1点・聖書1冊、迪巴恩布農社區文化訪
問團）
- 29日 ●アイヌ民具資料受贈（編み袋1点、芦沢ヤ
エ氏＝平取町）

1月

- 1日 ●年初カムイノミ（当館ポロチセ）
- 14日 ●アイヌ民具資料受贈（刀身1点、横関吉
郎＝札幌）
- 21日 ●松浦武四郎記念館「アイヌ伝統舞踊体験教
室」講師派遣（白老民族芸能保存会事業、
三重県三雲町＝村木美幸、高橋志保子）
- 25-27日 ●「ロシア・アイヌ資料の総合調査研究」
資料整理派遣（千葉市＝村木美幸）
- 31日 ●「ポロト地区活性化検討会議」出席（白老
町＝山丸和幸理事長他）

2月

- 1日 ●月初カムイノミ（当館ポロチセ）
- 2日 ●日胆地区高校養護教諭研究会（当館映像展
示室＝講師：村木美幸）
- 3日 ●静内町郷土館講座「アイヌの霊送りーイヨ
マンテを中心に」講師派遣（静内町＝秋野
茂樹）
- 4日 ●松浦武四郎記念館「アイヌ伝統舞踊体験教
室」講師派遣（白老民族芸能保存会事業。
三重県三雲町＝村木美幸、高橋志保子）
- 6日 ●臨時理事会（山丸和幸理事長、水上正司事
務局長＝退任、木村直樹理事長＝就任）
- 15日 ●退職＝秋野茂樹（学芸課長）
●臨時評議会（和田輝雄専務理事＝退任、野
村義一理事、加藤忠理事、舟橋滋理事＝就
任）
- 16日 ●臨時理事会（舟橋滋専務理事、野本勝信常
務理事＝就任）
- 19日 ●就任（出向）＝久慈幸男事務局長・総務課

長事務取扱（白老町産業経済課主幹）

- 20日-3月31日 ●旭川市博物館企画展「削る、削る、
彫る～アイヌ男性の手仕事と技」資料貸出
（民具資料等27点）
- 22日 ●「アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業」
講師派遣（埼玉県立和光国際高等学校＝野
本正博）
- 24-26日 ●松浦武四郎記念館「武四郎祭り」出演
（白老民族芸能保存会事業。三重県三雲町＝
職員12名＋保存会会員2名）



- 28日 ●『伝承記録5 虎尾ハルの伝承 鳥』刊行
（B5判149頁、CD付き）

3月

- 1日 ●月初カムイノミ（当館ポロチセ）
- 14日 ●「ロシア・アイヌ資料の総合調査研究」総
括会議派遣（静内＝児玉マリ）
- 18-22日 ●国立民族学博物館第3回国際シンポジウ
ム「オセアニアにおける博物館と先住民」
発表派遣（大阪＝野本正博）
- 22-23日 ●「全日本郷土芸能協会指導者研修会」出
席（白老民族芸能保存会事業。東京＝村木
美幸）
- 27日 ●新就業規則、給与規程、労使協定書調印
（4月1日より発効）
- 30日 ●理事会・評議員会（平成12年度事業計画第
三次変更案及び収支予算書第三次変更案の
承認、平成13年度予算・事業計画の承認等）
- 31日 ●『アイヌの衣服文化』（増補版第二刷）刊行
（B5判81頁、フルカラー）

4月

- 1日 ●月初カムイノミ（当館ポロチセ）
●辞令交付 伝承課長・新井田幹夫（伝承課
解説係長）、学芸課主幹（学芸係長事務取
扱）・村木美幸（学芸係長）、伝承課解説係
長・熊野薫（伝承課解説係）、伝承課伝承係
長・野本三治（伝承課解説係）、総務課総務

係・山丸悦子（伝承課長）、総務課総務係・山丸郁夫（伝承課長補佐）、伝承課伝承係・久保紀子（定期職員）、同・河岸麗子（同）、総務課総務係・上河由紀（臨時職員）、学芸課庶務係・伊藤栄子（伝承課伝承係）

●夏季営業体制（4月～10月，開館時間8:00～17:00）

- 10日 ●大阪人権博物館第50回特別展『描かれた「異国」「異域」』資料貸出（絵画資料17点）
- 12日 ●体験学習館建設予定地の整地に伴うカムイノミ（祭主＝新井田幹夫）
- 20日 ●印炳善・韓国生活史博物館館長一行来館
●財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「アイヌ文化再現マニュアル作成企画委員会」出席（札幌＝野本正博）
- 24日 ●博物館展示場監視カメラ交換
- 25日 ●チブサンケ（舟下ろしの儀式）



5 月

- 1日 ●平成13年度ポロト地区安全祈願祭（白老観光商業協同組合と共催。当館コタンコロク像前、祭主・新井田幹夫）



- 5日 ●ウタリ協会白老支部「イヌイット文化交流会」開催（当館ポロチセほか＝カナダ・ヌナブット準州から20名来館。文化セミナー同時開催）



- 8日 ●体験学習館着工
- 12日 ●『伝承記録5 虎尾ハルの伝承 鳥』刊行に伴う虎尾氏遺族への挨拶方（静内＝村木美幸、志賀雪湖）
- 17日 ●エプソン会古式舞踊公演（札幌＝12名）
- 23日 ●「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席（札幌＝村木美幸）
- 24日 ●全日空ウエスタンクラブ古式舞踊公演（千歳＝8名）
- 30日 ●平成13年度第一回理事会・評議会（平成12年度事業報告・決算等）

6 月

- 1日 ●月初カムイノミ
- 2-3日 ●「白老牛肉祭り」職員派遣（3名）
- 11日 ●「中国広州テレビ局視察団歓迎会」出席（登別＝3名）
- 13日 ●第1回博物館事業検討会議（久慈幸男事務局長他、職員13名）
- 18日 ●聞き取り調査（平取町＝本田優子、村木美幸）
- 19日 ●第2回博物館事業検討会議
●体験学習館仮供用開始
- 28日 ●第3回博物館事業検討会議
- 30日 ●『アイヌ民族博物館研究報告 第7号』刊行（B5判102頁）

7 月

- 1日 ●月初カムイノミ（当館ポロチセ）
- 1-26日 ●文部省・国立教育会館社会教育研究所主催「平成13年度博物館職員講習」受講（東京＝野本正博）
- 4日 ●聞き取り調査（平取町＝本田優子）
- 6日 ●平成13年度第1回アイヌ文化教室「口承文芸の夕べ」（当館ポロチセ＝講師：本田優子、口演：木村イト氏・壁岸ヤナ子氏、参加者：31名）



- 7日 ●「白老小学校古式舞踊講座」講師派遣（白老町＝6名）
 8日 ●カナダ・ケネル市代表団来館（スティーブ・ワレス市長他28名）



- 10日 ●白老町・ケネル市姉妹都市盟約20周年記念事業「カナダ・日本文化交流会」古式舞踊公演（白老町＝14名）
 11日 ●体験学習館完成（木造平屋建190平米、180人収容）



- 16日 ●「だて噴火湾縄文フェスタ」チセ展示作業職員派遣（伊達市＝塩田知治、山丸郁夫）
 16日-8月3日 ●「だて噴火湾縄文フェスタ」資料貸出（民具資料7点）
 18日 ●第40回北海道博物館大会参加（倶知安町＝久慈幸男事務局長以下7名）

- 19日 ●体験学習館完成祝賀会（理事・評議員・職員等47名）
 19日-9月3日 ●旭川市博物館第27回企画展「北の民 樺太でくらししたアイヌの人々」資料貸出（民具資料他9点）
 21-22日 ●「第16回石神火祭り」ムックリ製作体験講師派遣（森田村＝松永八重子以下3名）
 27日 ●丸形郵便ポスト園内設置。
 28日 ●「だて噴火湾縄文フェスタ」古式舞踊公演（伊達市＝15名）／同・チセ展示撤去作業・職員派遣（塩田知治、山丸郁夫）

8 月

- 1日 ●月初カムイノミ（当館ポロチセ）
 3日 ●「第18回北海道大学アイヌ納骨堂イチャルパ」出席（札幌＝久慈幸男事務局長、山丸郁夫）
 4-6日 ●平成13年度文部省科学研究「ロシア、アイヌ資料の総合調査研究」研究会派遣（稚内市＝村木美幸・児玉マリ）
 5日 ●平成13年度第2回アイヌ文化教室「鹿笛を作ろう」開催（講師：栢谷隆男・札幌篠路高等学校教諭、参加者：47名）



- 8日 ●第4回博物館事業検討会議
 10日 ●「アイヌ文化振興等施策推進北海道会議」出席（札幌＝村木美幸、傍聴：久慈幸男事務局長）
 12日 ●アイヌ民族博物館親子で楽しむアイヌ工芸教室「ゴザ編み、鹿笛・弓矢作り」（体験学習館＝講師：野本正博、松永八重子他、参加者：27名）
 17日 ●アイヌ民族博物館先祖供養祭（ポロチセ＝全役職員）
 18-19日 ●道委託事業「アイヌ工芸品展示会」ムックリ製作・演奏体験講師派遣（札幌＝岡田恵介、倉部テル子）
 18日 ●アイヌ民族博物館絵画コンクール「コタンを描こう」表彰式（体験学習館＝応募総数

49点)

- 20-31日 ●博物館実習生受入(3名)
23日 ●北海道教育委員会訪問(札幌市=木村直樹
理事長、舟橋滋専務、久慈幸男事務局長)
24日 ●千葉大学科研グループ来館(佐々木利和氏
他)
25日 ●仙台市教育長一行来館
27日 ●台湾行政院原住民委員会文化園區陳管理局
長他3名来館
27日 ●東京国立歴史民俗博物館一行来館
30日 ●「平成13年度北海道博物館協会学芸員職員
研修会」参加(平取町=村木美幸、博物館
実習生3名)

9 月

- 1日 ●月初カムイノミ(当館ポロチセ)
●ウタリ協会登別支部「ベッカムイノミ」参
加(登別市=野本正博)
2日 ●ウタリ協会千歳支部「アシリチェブノミ」参
加(千歳市=野本正博)
12日 ●平成13年度第2回理事会・評議員会(各種
規定の改定、第一次事業計画・予算変更等)
15日 ●札幌アイヌ文化協会「アシリチェブノミ」参
加(札幌市=野本正博)
20日 ●胆振教育局初任者研修受入(講師:本田優
子他)
21-22日 ●平成13年度第3回アイヌ文化教室「アイ
ヌ語を学ぼう」(講師:中川裕・千葉大学教
授、参加者:のべ80名)



- 21-23日 ●アイヌ語研究グループ「パルンペ」チセ
宿泊研修(中川裕氏以下8名)
22日 ●ウタリ協会白老支部「ベッカムイノミ」参

加(白老ウヨ口河畔=祭主:新井田幹夫以
下13名)

- 22-23日 ●「しらおいチェブ祭」伝統漁法・ムック
リ製作体験協力(白老町=5名)
25日 ●聞き取り調査(静内=安田益穂)
27日 ●台湾行政院文化建設大臣一行来館

平成13年度の主な役職員体制

理 事 長 木村直樹(会社役員、白老町議会議員)
専務理事 舟橋 滋(元白老町教育長)
常務理事 野本勝信(会社役員、北海道ウタリ協会
白老支部長)
事務局長・総務課長事務取扱 久慈幸男(白老町総
務課参事=出向)
伝承課長 新井田幹夫
学芸課主幹・学芸係長事務取扱 村木美幸
特別学芸員 児玉マリ
特別学芸員 本田優子
学 芸 員 野本正博

年間入場者数

平成12年度

4月	11,837	10月	51,502
5月	29,488	11月	22,489
6月	42,481	12月	14,740
7月	35,119	1月	13,948
8月	30,368	2月	16,211
9月	40,715	3月	9,494
		計	318,392
		(前年比)	▲87,718

平成13年度

4月	11,852	(前年比15)
5月	30,613	(同1,125)
6月	46,362	(同3,881)
7月	35,372	(同253)
8月	28,078	(同▲2,290)
9月	34,147	(同▲6,568)
半期計	186,513	(同▲3,495)

アイヌ民族博物館だより No.47・48

発行 財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4
電話 0144-82-3914 FAX 0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 2001. 9. 30

ホームページ <http://www.ainu-museum.or.jp>
Eメール museum@ainu-museum.or.jp
印刷 株式会社北海道機関紙印刷所